四〇六　東京への救援隊派遣についての報道

大正一二年（一九二三）九月

谷村でも救援隊
東京へ急派す

南都留郡谷村町では、同町出身の在京者で、今回の震災者を救護すべく、約三千名の救援隊を組織して、武装の上出発した

（大正一二年九月七日「山梨日日新聞」）

【解説】関東大震災の影響は大きく、その一つに谷村町出身者救援のために救援隊が派遣されたことを指摘できよう。

四〇七　南都留郡下の被害報道

大正一二年（一九二三）九月

南鶴被害

谷村吉田両署調査

△福地　は比較的少く、土蔵の壁が脱落した位のもので、工事中の吉田署は壁に亀裂を生じた
△瑞穂　工場の倒壊多し
△船津　産屋ヶ崎から浅川に通ずる道路に、嘘山から石が転落し、同所の交通を不能ならしめた
△中野　一番悲惨で、山中派出所からの報告では、山中区家屋三棟倒壊、人事不省一名、長池区十三棟倒壊し即死一名、平野区全滅し死者四五名ある見込
△長浜　家屋多数倒壊す
△河口　家屋全壊一、半壊三、其他十一棟に被害あり
△宝村　小学校及び役場半壊となり、中津森山田不二雄（一六）は屋根から落ちた石で即死した
△東桂　東電鹿留発電所全壊し、重傷二名を出し、送電不能となる
△禾生　同上駒橋発電所に送水する田野倉水路破壊し、桑園及家屋に浸水し、谷村町に通ずる落合橋危険に瀕す
△谷村町　県立工商学校大損害を蒙り、約十万円に及ぶ、同町仁科又蔵方火薬庫半壊、東電谷村発電所も壁に亀裂を生じ、送電を中止した、谷村電燈発電所も水路に故障を生じ送電不能となり、同町下町斎藤勝治方土蔵半壊す
△富士山　八合目の石室二棟倒壊、五合目以下は無事だと

（大正一二年九月一一日「山梨日日新聞」）

【解説】関東大震災によって県内では死者二〇名、家屋の全壊五七六戸などで、南・北都留郡のほか甲府・南・中巨摩郡、西山梨郡、甲府などの被害が多かった。この新聞記事によると、現都留市域の村々の被害が大きかったことが報道されている。

四〇八　郡内林野の震災被害甚大の報道

大正一二年（一九二三）九月

郡内林野の
震災甚大

林野のシン災状況調査の為め、被害の甚しかった郡内に出張、実地視察を遂げて帰庁した新山技手は語る、「今回のシン災で、林野被害の最も甚大であったのは、南都留郡東桂村御正体山と鹿留山を中心として、忍野・中野・明見・西桂・道志・開地村等に亘り、老齢な天然造林地を除く以外は、人工造林地でも天然造林地でも、又防火線其他の設備地でも殆と区別なく、縦横に亀裂を生じて危険に瀕していたのが、其後の豪雨で孰れも崩壊し、土砂を押流した為め、耕地の埋没したもの尠からず、忍野村は百五十町歩の耕地が埋没し、百町歩の浸水を見、平野は同様崩壊の為め耕地百町歩を埋没し、明見村山葵沢、向原間抔も甚しひ崩壊で、鹿留山付の西桂村倉見の如きも被害夥しく、境は人家十五、六戸を埋没された、県の施設中であった鹿留の軌道林道や、炭焼小屋・製材所抔も跡形のないやうな惨害を蒙った、宝・笹子方面へ来ると、余程被害の程度が軽いが、初鹿野の焼山沢附近は崩壊が甚だしく、兎に角鹿留山を中心として老齢の天然林以外は殆ど全滅に帰したと云っても過言でない

が、之れが被害面積六百七百町歩に対しては、荒廃地復旧工事を施行するより外はないが、農商務省からも係官が実地踏査に来り、神奈川県下に亘り約一千町歩の被害面積に及ぶので、復旧経費も一千五百万円位は要しやうと云って居たが、県は猶ほ詳細調査を遂げた後、之等山林サイ害地に対しては相当善後策を講ずるに至るであろうと

（大正一二年九月二六日「山梨日日新聞」）

【解説】 関東大震災で痛めつけられた郡内地域に九月中旬に大水害がおこり、被害はさらに拡大していった。この被害で特に林野が荒廃していった。

四九　郡内地震災害地の視察報道

大正一二年（一九二三）一〇月

県下震水害地視察記

（九）明見から荒涼の東桂境区迄

帰社して　天野特派員

明見村の古屋区・大明見等も、地震で幾分の災害を受けて居る上に、山腹の亀裂から豪雨が浸入して、十五日の朝からは山崩れ、此の部落も内野区と大差ない惨状、かてゝ加へて暴漢騒ぎ迄が同じ様である。損害の程度は内野に比して幾分少かろうか、部落民は未だに当時の脅へから全然恢復しない、こゝも亦一面の磧、その惨状は之を目撃したものでなくては恐らく想像すらも出来まい、話しても尽せず、書いても尽きまい、災害の状況は略前述内野区と同じ様であるから、ここに省略する

其れより東桂村部落に入る、此処も地震は余程強かったものと見えて、平地の此処彼処には大小の亀裂が生じている、傾いた家、屋根を壊された家、壁を落された家、その凡てが大被害を受けてはいるが、既に震後日も経ったことゝて、何れも曲りなりにも整理されて居る二、三の土地の人に聞いて見れば、只恐ろしかったと云ふて云ひ合はした様に身慄ひをする損害も決して少くないと云ふのみで、凄惨なる当時を追想するだに厭はしいのか、その模様を詳しく語る者もいない

被害状況を視察しつゝ鹿留発電所に行く、煉瓦造りの発電所は無残にも大破して、機械は天井の下敷となって壊れ、到底使用し得られそうもない、外廓には亀の甲の様に大ヒビが入り、屋内の天井は墜ちて惨澹なる光景を呈している、聞けば第一回の強震で大破し、係員一同は逃げ出したが、やむを待って再び屋内に入った時に、更に第二回の強震に見舞はれて、逃げ遅れた三名は墜落した天井に圧せられ、二名は惨死し、一名は重傷を負ったとの事である、此附近も亦亀裂は甚だしい、殊に見る限りの沢辺に添ふ山腹は崩壊して耕地を押流している（水害の状態は大同小異なれば之を省く）

記者は震害に襲はれた上に、生活の根拠となすべき耕作物は勿論土地迄も奪ひ、その上農閑期の副業とすべき山林迄奪ひ去るとは天道果して是乎非乎と思ひ迷ひつゝ境部落に入る、此処も又震災による山腹の亀裂、耕地石垣の崩壊、家屋の傾歪などのある処へ、十四日来の豪雨で山腹は全く崩壊しつくした。部落民は是れを見て一同桂

川の対岸へ避難したので、人命には幸何等の損傷もなかったが、山崩れに依って部落一帯は小石の磧となってしまった、人家の影もない、耕地もない、何物の影も認められない荒涼の地に、只認めらるゝは流れ木の山ばかりである、以前の様子を知らないものゝ目には、一体此処にも部落があったのかと疑はれやう……記者も亦その一人である、部落民が山崩れの跡で、土下五六尺も掘ては家財を取出し、運び出して居る有様はこの上もなく悲惨である、此部落は戸数十三戸の小部落ではあったが、今やその全部が地中に埋れ、耕地も全く埋没して、今後の改復（ママ）もおぼつかなく見える、約六十の人が衣食住を奪はれて了ったのである、其の惨状を目のあたり見ては記者ならずとも涙を催さずにはをられまい

同村の山崩れは大小千余ヶ所、畦畔土手等は一面に崩れて押出し、大小の亀裂は山腹一面に見へる、是れとても何時崩れて押出すかも知れないので、部落民の人達は、今猶戦々恟々として作業など思ひもよらない、当局は如何に是れを措置するつもりであろうか、救助の道を講ずるは、こゝに贅する迄もないが、先づ一日も早く今後の災害を予防する方法を講究して、とまれかくまれ意を安んじて復旧に従事せしむる様にしなくてはなるまい、記者はこゝから谷村町に出でて、すぐその足で谷村署を訪れたものであった

（大正一二年一〇月二日「山梨日日新聞」）

【解説】 震災と水害で痛めつけられた東桂村などの惨状を記した新聞記事である。東桂の鹿留発電所や境部落の実状をリアルにえがいている。

四一〇　郡内地震水害地の視察報道

大正一二年（一九二三）一〇月

県下震水害地視察記

（廿一）大袈裟な谷村の暴漢騒ぎ

帰社して　天野特派員

震災当時同地方の事情に就いて、北田谷村署長、吉田署清水部長等は交々語る、同地は一日以来の強震に、誰も家の中には居耐たまらず、何れも家財道具を顧みず、安全と認むる処に避難して脅へ切って居た、警察官とても地震を物凄く思はぬものはなかったが、とにかく人命と財産の保護といふ大任を双肩に担って居るので、一般の人々と一所になって避難して居る訳には行かないし、又此の混雑を利用して、窃盗を働く様なものがないとも云へないので、全員出動して警戒に当り、不眠不休といった有様だったので、かなりに疲れて終った

そこへ以てきて、三日目の夕方には暴漢約二千名が、横浜方面から入り込んで来るとの風評が伝はってきたので、人心恟々たるものがあったが、警察ではそんな事がと打消して居たものであった、処が夜に入ると、道志村の役場から、暴漢二千名来るとの報告が郡役所に着く、是れと同時に谷村警察署へも同文の飛報が来る、道志村駐在所からは、強盗・強姦・掠奪等あらゆる暴行を働いて居るとの報告があるといった騒ぎで、今は署長も全部を打消すだけの証拠がないため、心配になって吉田署へも通報して警戒に任ずる事としたが、その時には既に吉田にもそんな風評が伝はっていて、自警団・

青年団・消防組の人々は、何れも獲物を取って起っているという話

是れを聞いて谷村署では、直ちに応援を県警察部に乞ひ、県からは早速三警部に四十名の巡査を附して同地に出張せしめたものだが、北田署長はよく〳〵考へてみると、此の騒ぎの中へ応援巡査が乗込もうものなら、さなくてさえ脅えている人々は、愈々暴漢襲来を事実として一騒ぎ騒ぐだろう、之はいかぬと気がついて、県からの応援は、万一の場合非常出動する様にと、大月に止まる様に手配して置いて、谷村の方は青年・消防・有志等と勢を合て(ママ)

郡役所では、一方村から報告を得ると一方ならず驚いて、宿直の書記は郡長にも計らずして警察へ報告すると同時に地方各町村へ右の趣きを文書を以て伝へたものだった、之がため、さなきだに脅へて居る地方の人は、いよ〳〵驚いてしまひ、一々地震なぞにおびへては居られないと、急に飯を焚くやら、握飯を造るやら、その間にも強震は間断なく襲ふので、万一家でも仆れて、火災でも起る様な事があっては一大事と、是が非常を戒めても、其んな事に耳を借さばこそ、握り飯を拵へるもの、家財資宝をとりまとめて荷造りをするもの、何れも命あってのものだねとばかりに、人目に立たぬ処に避難してしまったので、どの家も空っぽうといふ有様、これ又警戒の必要を生じて、警察官は少からず苦しまされたとか

道志方面からの非常飛脚は、櫛の歯を引く様にとんで来る、各村有志は郡からの通知状を示して、警察の出動を促してやまず、其んな馬鹿な事があるべき理由がないと言ふて諭すと、却って殺気立った一般の人は、警察の不甲斐なさを罵る仕末に、流石署長も堪りかね、現場に急行して見やうかと思ったが、それとても署には多くの人が詰掛けて居るので、出動したなぞと一般に伝はろうものなら、一層大騒ぎになるだろう、マテヨと署長は一計を案じ、警戒を口実に巡査をつれて署を出で、中途から青年・消防組員等と共に、現場に向って急行したのだ相だ

七里の山道にかゝると屢々襲ってくる強シンに、山は鳴動してその凄さと云ったらない、地シンの都度山腹には亀裂が生ずる、まかり間違へば、暴漢に出逢はずとも、地シンのために命をとられぬ限りもなかったが、署長はとにかく現場に達して捜査をしたが、暴漢は愚(おろか)、其れらしいもの影すら見えない、どうした事かと段々調査の歩を進めてゆくと、はしなくもかゝる虚報の伝へられた原因が判明したのであった。一体その原因とは何だろう

（大正一二年一〇月八日「山梨日日新聞」）

【解説】 関東大震後の人心不安の様相がこの新聞記事の暴漢二千人来襲の誇張した情報が罷り通ったところにも見出すことができよう。次の史料も参照されたい。

四二　関東大震災時の谷村町の対応状況報道

大正一二年（一九二三）一〇月

大地震当時の
谷村町の大活動振
暴利取締に先立て町費で米を買占

原価で売ったのは大手柄

南都留郡谷村町に於ける、しん災当時の郡当局・町当局・警察当局・各団体の活動振りは、今思ひ出しても痛快極まる程である、激しん当日、町当局は青年・軍人・消防の三団体と協議し、直に救護本部を設け、自転車隊を以て伝令を置き、町内全般の連絡を取り、救護・救済・警戒の任に当ったのである、そしてまづ此の激しんが続くに於ては、物資の窮乏が襲ひ来るに違ひない、何よりも心配になるのは米であるとて、町会では町内の米穀商が二名迄が当選して議員になっているのを幸、直にその時の相場で、町内に於ける米の買占を行ったのであるが、約四百俵の米を一時に引取ることが出来ないので、各自の倉庫に保管して貰ふ事として、必要に応じ之を小学校の庭に持ち出して売る事にした、一方青年団員はメガホンを利用して、辻々で「皆さん、米は沢山ありますからお入用の方は学校の庭でお売りいたします、一升××銭であります、之より高く売る店があったら、本部までお知らせ下さい」と斯様に宣伝して廻った、然もそれは激しんの翌二日の措置で、政府の暴利取締令などが公布されない先に、此あざやかな措置を執ったのは、機宜に適したものと町民は云ふている、一方には人心の安定を図るため、しん源地はいづこ、今後の予しんは如何にといふ事を確め、寸時も早く町内に知らせる必要ありとして、各方面の情報を蒐めようとしたが、此時既に交通・通信の一切は杜絶してしまった後なので、如何ともすることができなかった、そのうちに東京・横浜全滅等各地の情報が伝へられ、甲府全滅といふような騒ぎもあったので、決死隊を組織して甲府の安否を確める事にしたが、それには青年団中のマラソン選手某君と、谷村署の巡査一名とが其任に当って、笹子の険を突破して、甲府の状態を見届けて帰谷して一般に報告した、先安心と思ってる間もなく、今度は道志村に鮮人来襲の流言が盛に伝へられた、この事は嘗ても報道した如く、二鮮人を二千人と聞き誤り、誇大に吹聴されたので、一時は全く生きた空はなく、町内男子は総て第一線に立ち、飽迄も死守するといふ悲壮な覚悟をしたのであった、鮮人来襲が虚説であるといふ事が判明すると共に京浜在住の町出身者の安否が気遣はれるやうになったので、今度は青年団を主として救援捜索隊を組織して出京させ、本所・深川等の焼跡を尋ね、町出身者の安否を全部調査して帰ったのであった、総ての措置が思ひがけぬ程敏速に行はれた事は、甲府などより遙に勝れて居ったといふ

（大正一二年一〇月二七日「山梨日日新聞」）

【解説】 谷村町を中心として流布した虚報のなかでもっとも注目すべきは、道志村に朝鮮人二千人来襲についてであろう。この関東大震災のさなかで、数多くの朝鮮人や社会主義者が虐殺されたことはよく知られている。